

地球の弁証法論理

The Dialectic Logic on the Earth

高原 利生*1
TAKAHARA Toshio

*1 所属なし

1. はじめに

宇宙の知的生命の弁証法論理[FIT2013]を推測する準備として、地球の論理の前提と到達点を述べる。

2. 地球人の論理に至る媒介の前提

地球人は、外界と主体の前提のもとで、世界観、制度や技術、生きるモデルの媒介を経て論理、方法を作る。

1. 地球の外界、主体の前提

地球、月、太陽の属性、運動、地球人、地球上の生命の属性が前提となる。

2. 態度、価値、世界観による媒介

1) 今まで、人間の歴史で、大きく可能性を作ったのはエネルギーだった。この現実的可能性が、人にその可能性を現実性に変える必要性の意識を生じさせ、必要性、可能性、現実性の矛盾ができた時が、人間の歴史に二度あった。

今は、この矛盾に別の問題が生じている。太陽由来の化石燃料が枯渇しつつある。地球内部の地殻変動や小惑星衝突などによる太陽依存のエネルギーの広範囲長期の壊滅から脱する必要も分かってきた。これらのため、あらゆる時間空間に普遍的で安全なエネルギーの必要が生じている。

2) 従来、人間は、得られるエネルギーの限度で価値の現実性を最大限可能にする方法とそのための世界観を求めてきた。無意識の感じ方、態度、価値、粒度を規定する、歴史と未来像の認識像が世界観である[THPJ 201503]。

価値は多様であるが、種の存続、個体の生と健康の維持、その前提での生の属性である自由、相手への愛の重要さは、ほぼ共有されていると思う。

今までは、数千年前、農業革命が、太陽と自然を十分に活かす態度、価値を表現する自然との一体化世界観と同時に実現された。その過程で物々交換が成立し[TS2010 他]、等価原理ができる。200年前の産業革命が、増大したエネルギーを活かす対象化世界観と同時に実現された。

一体化は、人間と他の生命を含んだ対象を一体的にとらえようとする態度で、愛は、対象を一体化し向上を目指す価値である。対象化は、対象を人間から切り離し相対化する態度で、自由は、対象を操作変更する能力の価値である。価値が論理に用いる属性を決める。[THPJ201501]

今の可能性を実現する可能性と現実性の矛盾の解には、生じている問題の解決と必要な価値の最大化が要り、従来の一体化世界観と対象化世界観を統一した世界観が望まれる。このために解くべき一体化と対象化の矛盾は、二つの「個-関係-対象」という矛盾モデルの「関係」間の矛盾である。この矛盾は二項を高い次元で統一できる一体化矛盾[FIT2011]である。

この実現で、客観的に、社会に、全ての人と他の生命、他の対象間の、あるべき一体化と対象化を統一した関係が

でき、主体の態度として、客観と主観が一致できる。これが、今の問題を解決し価値の実現を最大化する。

1)と2)の課題が重なったのは地球の特異な事情による。

3. 技術と制度による媒介

人の認識、変更は、物々交換制度をはじめとする制度、技術、科学、芸術[TJ2003Jun][THPJ201501,03]を介し実現された。

4. 生きるモデルによる媒介

事実の最小モデルを矛盾とし、外部との関係を持つ「項-運動(関係)-項」の生成と運動(関係)を定義とした。

3. 地球人の弁証法論理[FIT2015]

1. 粒度[FIT2005 改]、オブジェクト[FIT2003 改]、網羅という最小の基本概念で、生きる全てを扱えるようになった。

(事実と価値の粒度の見直し管理をする根源的網羅思考により決まった)矛盾を単位とする弁証法が新しい弁証法論理である。[TS2010,12][FIT2015][THPJ20150101,02,03]。

認識と事実変更に通ずる方法として、事実の矛盾と解の矛盾がある。認識は事実の矛盾を解くこと、変更は解の矛盾を解き実現することである。存在と運動(機能)のオブジェクト追加、分割、二項の関係づけ、媒介、入れ子が認識、変更の方法の根本である[THPJ201502]。本稿も、矛盾とその入れ子による解の叙述である。

2. 矛盾は、単なる変更である差異解消矛盾と二項の両立矛盾からなる。矛盾の解に次の実現形態がある。

1) 差異解消矛盾の解が 11) 片項または両項の量的変化を起こす場合、12) さらにそれが量質転化を起こす場合。

2) 両立矛盾の解が両立の実現形態を示す場合。

3) 両立矛盾の解が、31) 片項の質的变化を、32) 両項の質的構造変化を、33) 質的構造変化を生起しないまま両項の向上を、それぞれもたらす場合。33) は両立矛盾の一種の一体型矛盾の場合である。[THPJ201501]

3. 問題の時間空間粒度が大きくなるにつれ、問題の矛盾は、[差異解消矛盾→一般的な両立矛盾→一体型矛盾]を解くことが必要になるように進んでいく。一体型矛盾の解の必要十分条件は、二項が相互に入れ子になることである。これらのための詳細条件の検討が課題である。

4. 終わりに

地球の論理の前提、それによる地球の論理を述べた。外界と主体は人が容易に変えられないが本稿の前提は、人により変更可能な内容で、その認識と変更のための弁証法論理はできつつある。さらに事実と価値のための論理生成、その相対化を続けなければならない。

参考文献

文中の引用は[発表の場 発表年]を記す。THPJ『高原利生論文集 1,2,3』参照。発表の場は、FIT: 情報科学技術フォーラム、TS: TRIZ シンポジウム、TJ: TRIZ Journal、THPJ: 中川徹の『TRIZ ホームページ』